

ミュージアム・アイズ

MUSEUM

Vol.59
2012

EYES

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

特集

特別展

氷河時代のヒト・環境・文化 THE ICE AGE WORLD



長野県信濃町仲町遺跡BP第1地点
信濃町教育委員会所蔵



- 新館長就任
- 来館者50万人達成
- 展示&リサーチ
- 市民レクチャー
- 学芸研究室から
- 収蔵室から
- 南山大学協定通信
- 入館者数の動き・団体見学の記録・M2カタログ
- 博物館友の会から

企画展 冒険家・植村直己の足跡
日本考古学絵葉書小史
—考古学研究における絵葉書利用に関する覚書—
現代を映す鏡としての伝統工芸
雑の魅力—浮世のさまの三幅対—

あなたも展示解説員の活動に参加しませんか！

明治大学博物館

新潟県津南町正面ヶ原D遺跡
津南町教育委員会所蔵

2012年度 明治大学博物館特別展

氷河時代のヒト・環境・文化

2000年に発覚し考古学界を揺るがした「前・中期旧石器時代遺跡捏造」事件の後、日本列島最古の人類文化はどのように探求されたのか？最初のヒトの足跡はいつ、どのように現れるのか？最初のヒト達は、どのように新天地を拓いたのか？本特別展は、考古学・人類学の分野で近年さかんに取り組まれている日本列島へのホモ・サピエンス（現代人）の拡散と定着について、日本各地の最古級の考古資料を用いて、研究の現状と考えるシナリオを紹介し、「現代人の拡散」はアフリカでの現代人の進化を起点にユーラシアとオーストラリアで約20万年前～3万年前にかけて生じたグローバルな現象です。展示では、現代人が世界各地に拡散を繰り返していた最終氷期の気候変動やヒトと共存した絶滅動物を紹介します。展示のメインテーマとなる日本列島に現代人が定着していった様相については、全国約30カ所の博物館・研究機関の所蔵資料を展示し、北海道から九州まで全国各地から出土している4万年～3万年前の最古級の旧石器を一望しながら最新の研究を分かりやすく紹介します。

1. 気候変動と絶滅動物

約20万年前にアフリカで進化したホモ・サピエンス（現代人）が、アフリカから拡散しはじめたのは約7～6万年前といわれています。そして4万5千～4万年前までには、西はヨーロッパ西部に、東はオーストラリアにまで到達したことが化石人骨と考古学的な証拠から分かっています。

ヨーロッパでは、現代人はホモ・ネアンデルターレンシス（ネアンデルタール人）と接触しました。より発達した道具と生存戦略をもった現代人は、約3万5千年前までにネアンデルタール人と交替し、ネアンデルタール人は絶滅しました。近年の核DNAを用いた遺伝子の研究では、現代人もわずかながらネアンデルタール人に由来する塩基配列をもつことが分かり、両者のあいだにはある程度の交雑があったといわれています。一方、オーストラリアは無人の大陸でしたが、インドネシアから連な



ケナガマンモス（レプリカ）
（当館蔵）

る島嶼部の一角にあるフローレス島に少なくとも約1万8千年前まで生息していたホモ・フロレシエンシスと現代人が接触したかどうかはよく分かっていません。

展示では、現代人が拡散した時代の気候変動や移住する先々で出会ったヒト・動物を紹介します。特に最後の氷河期（最終氷期）に絶滅した大型哺乳動物に焦点をあてます。

2. 最古の石器を求めて

約4万年以前の時代にあたる「前・中期旧石器時代遺跡捏造事件」の発覚後、「捏造」行為とは無関係な資料の再評価や4万年を遡る新たな遺跡を追求する発掘が最近10年間にわたって取り組まれてきました。前者の代表例は岩手県金取遺跡第III・第IV文化層、後者の代表例は長野県竹佐中原遺跡、宮崎県後牟田遺跡第IV・第V文化層、熊本県大野遺跡群、大分県早水台遺跡、長崎県入口遺跡です。近年発掘された島根県砂原遺跡は、その古さをめぐって地質・考古・火山灰など多方面から議論されています。

4万年以前の可能性があるこれら少数の遺跡をどのように評価するかは大きな問題です。それによって、日本列島人類文化の初源をめぐる考え方が大きく異なってくるからです。



岩手県金取遺跡第III文化層出土石器
（遠野市指定有形文化財）
（遠野市教育委員会蔵）

THE ICE AGE WORLD

2012.10.12-12.12

例えば、(1) 4万年以前の遺跡はそれ以降の文化に連続する（中期旧石器時代が存在する。ヒトは連続的に進化したか、あるいは交代劇が起こった）、(2) 4万年以前の遺跡は存在せず、4万年以上にはじめて遺跡が登場する（無人の日本列島にヒトが拡散し、後期旧石器時代が始まる）、(3) 4万年以前の遺跡とそれ以降の遺跡は断絶していて文化としては連続しない（より古いヒトの絶滅後、別のヒトが日本列島に拡散した）。

展示では、捏造事件発覚以降に4万年以前の研究を推進してきた金取遺跡、竹佐中原遺跡、後牟田遺跡を紹介します。

3. 新天地をひらく

4万年以前とは対称的に、誰が見ても遺跡がはっきりと増える画期があります。これまでに、主に九州地方と関東甲信越地方を中心にして4万年前に近い年代の遺跡が発見されています。放射性炭素年代測定（¹⁴C年代測定）では、較正年代（暦年代に補正された測定年代）で約3万8千年前の事例が知られています。これらの遺跡は、出土するローム層の呼び名をとり関東平野では「X層石器群」と呼ばれています。ただし、九州と中部日本の石器群との具体的な関係は今後の課題です。多くの研究者は、X層石器群を後期旧石器時代のはじまりと見ています。それは、関東平野では、より古い地層から確実な遺跡が見つかっておらず、X層石器群がそ



東京都武蔵台遺跡 Xb 層出土
局部磨製石斧
(府中市郷土の森博物館蔵)

の後の石器群の伝統に繋がる要素をもっているからです。

X層石器群の登場を日本列島への現代人の移住の証拠と積極的に評価することもできません。しかし、中国や韓国など周辺大陸の考古文化との関係は、いまだ不明確なままです。

展示では、中部関東地方のX層石器群を中心に各地の後期旧石器時代最古の石器群を紹介します。

4. 環状のムラ、登場

X層石器群を含む約4万年～3万年前にわたる後期旧石器時代前半期 (the Early Upper Palaeolithic:

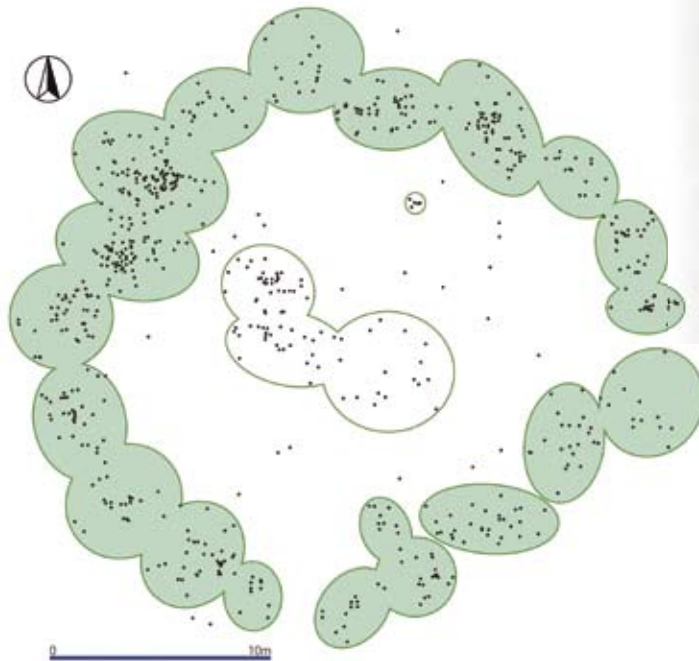
EUP) の石器群は、環状のムラが登場することで新たに画期を迎えます。また、槍先と考えられる台形様石器（台形・逆三角形・五角形など幾何学的な形状の剥片石器）が発達し、局部磨製石斧とともに代表的な石器の組み合わせになります。

環状のムラとは、ブロックと呼ばれる石器集中部が環状に並んだ遺跡のことをいいます。環状のムラと局部磨製石斧はEUP石器群に固有で、EUPの半ばには消滅し、その後、旧石器時代をとおして現れません。ブロックとは基本的に石器を製作し使用した場所です。なぜ人々が環状に集うのか、「大型獣狩猟」「祭祀」「防御」など諸説あります。また、環状のムラの成因についても、いくつかの単位的な集団が離れたり集合したりすることで環状のムラができるとする考えや、そうではなく集団は一つでムラ



東京都西之台 B 遺跡 X 層出土
礫器
(東京都教育委員会蔵)

- 主催：明治大学博物館
- 共同企画：明治大学黒耀石研究センター
- 会期：10月12日(金)～12月12日(水)
- 会場：明治大学博物館特別展示室
- 開館時間：10：00～17：00(入館は16：30まで) 会期中無休(※10月12日開幕日は13：00開館)
- 入場料：300円(高校生以下の生徒児童、身体障害者手帳・愛の手帳をお持ちの方、明治大学学生・教職員、明治大学博物館友の会会員、明治大学カード会員、明治大学リハビリアカデミー会員は会員証等の提示で無料)
- アクセス：JR御茶ノ水駅(中央・総武線)徒歩5分 地下鉄御茶ノ水駅(丸ノ内線)より徒歩8分 地下鉄新御茶ノ水駅(千代田線)より徒歩8分 地下鉄神保町駅(新宿線・半蔵門線・三田線)より徒歩10分
- お問合せ：明治大学博物館事務室 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 TEL 03-3296-4448
<http://www.meiji.ac.jp/museum/>



千葉県池花南遺跡第1文化層の環状のムラ（グレード2）
 （渡辺修一 1991『四街道市内黒田遺跡群第1分冊』千葉県文化財センター）

で行われた異なる活動の結果だと大きく意見が分れています。

とにかく環状に石器が分布することでは共通しているの、全体像が分かる約40の環状のムラを（いくつかの規則にもとづいて）分類すると、4つのカテゴリーに分けられます。グレード1からグレード4と名付けました。

展示では、それぞれの環状のムラを代表する石器群を紹介し、環状のムラ相互の関係をはじめ、EUP集団による資源獲得の活性化や人口増加に果たした環状のムラの役割を紹介します。

5. 海をわたり、山をひらく

X層石器群から環状のムラ石器群まで、石器に利用された石材は様々ありますが、山岳部と海上の島に原産地のある黒曜石に着目します。信州霧ヶ峰・八ヶ岳と海をわたった東京都神津島にある黒曜石原産地に初めてヒトが到達したのは、静岡県井出丸山遺跡の¹⁴C年代測定により3万8千年前であったことが判明しました。蛍光X線分析による遺跡から出土した黒曜石製石器の原産地分析が、近年大幅に進んだ結果です。最初に日本列島に定着した人々の行動力と技能には驚かされます。中部関東地方のX層石器群から環状のムラの時期までのEUP石器群について、産地別の黒曜石利用実態を分かりやすく地図の上で表すと、

EUP集団がとても広域にわたる遊動生活を送っていたことも分かります。

展示では、神津島黒曜石を多用していた静岡県沼津市の愛鷹山麓のEUP石器群、そして中部高地産黒曜石を多用していた長野県野尻湖遺跡群のEUP石器群ほかを紹介します。

6. ヒト - 資源環境系の人類誌

このように、EUPに限らず、黒曜石原産地をめぐる先史時代人の活動には、解明すべきことが沢山あります。明治大学黒曜石研究センターでは、2011年度から「ヒト - 資源環境系の歴史の変遷に基づく先史時代人類誌の構築」という大型研究を実施し、原産地として著名な和田峠に近い標高1400mにある長野県長和町の広原（ひろっばら）湿原一帯において、発掘調査と更新世から完新世初頭にかけての古環境調査を行っています。EUPから縄文時代にいたる黒曜石獲得活動と原産地の地形・気候・植生などの変化の関係を跡づけることが目的です。

調査は現在進行中ですが、展示では、2011年度～2012年度に行った発掘調査の概要と出土品を紹介します。



長野県長和町広原湿原（○囲み）と中部高地黒曜石原産地の山並み（写真：明治大学黒曜石研究センター）

< 特別展関連行事 >

第51回明治大学博物館公開講座「考古学ゼミナール」

特別展連動講座「氷河時代のヒト・環境・文化 - THE ICE AGE WORLD -」

毎週金曜日／全4回／講義時間：18：00～20：00

問合せ・申込み：明治大学リバティアカデミー事務局 <https://academy.meiji.jp/> TEL 03-3296-4423

第1講：10月12日（金）「ユーラシア東部における後期旧石器時代の成立」佐藤宏之（東京大学教授）

第2講：10月19日（金）「日本の旧石器時代人骨はどこまで遡るか - 列島に原人や旧人は渡ってきていたか -」松浦秀治（お茶の水女子大学教授）

第3講：11月2日（金）「最終氷期に生き、そして絶滅した象たち」高橋啓一（滋賀県立琵琶湖博物館上席総括学芸員）

第4講：11月9日（金）「日本列島にヒトが現れた頃 - EUPの世界 -」島田和高（明治大学博物館学芸員）コーディネーター

新館長就任挨拶

この度、4月1日付けをもちまして博物館館長職を拝命し、着任しました。私自身はこれまで博物館については全く知識を持ち合わせておりませんが、渡副館長・坂元事務長ほか4名の学芸員を中心とした優秀なスタッフのお知恵をお借りしながら、博物館業務について理解を深めようと悪戦苦闘している毎日です。就任後まだ日も浅いにもかかわらず、5月15日には、2004年4月のリニューアル・オープンの日から数えて50万人目の来館者をお迎えすることができ、幸先の良いスタートを切ることができましたことを喜んでおります。これを一つの節目にして、当博物館がさらに発展しうるためには何が必要とされるのか、いかなる改革が求められているのかをさらに深く考えていかねばならないと考えております。

大学博物館の使命は何よりわが国の最高学府としての高いレベルの調査・研究に基づいてこれを教育に活用するとともに、その成果を社会に発信することによって、社会における大学のレーゾンデートルを高めることにあると思われまます。2004年にアカデミーコモンの地階に従来の商品陳列館、刑事博物館、考古学博物館という3つの博物館が統合して新たなスタートを切った博物館も多くの方々のご支援・ご尽力によってすでに年間7万人を超える入館者を迎えるまでになっており、明治大学の研究と教育の独自性を社会に発信する上で大きな役割を果たしております。

当博物館が、我が国にある、数多くの大学博物館の中でも一頭地抜けた存在として高い評価を受けておりますのも、ひとえにその基礎部分である調査・研究のレベルの高さにあるといっても過言ではありません。研究・教育・社会連携の好循環を連動させることでさらに質的向上を目指すとともに、明治大学らしい、固有のミッションを絶えず問い続け、一層の発展に向けて全力を果たす決意です。皆様のご支援とご協力を何卒宜しくお願い申し上げます。



明治大学博物館館長 風間 信隆

来館者
50万人
達成！

2012年5月15日、明治大学博物館は50万人目のお客様をお迎えいたしました。2004年4月のリニューアルオープンの日から数えて8年1ヶ月での記録達成です。記念すべき50万人目となられたのは、神奈川県在住の武井昭雄さんです。武井さんには、風間館長より記念品を贈呈いたしました。

なお、これまでの来館者数の推移を見てみると、右肩上がりに数字が増えていることがわかります。



風間館長(左)より記念品を贈呈される武井さん

2004年4月のリニューアルオープンから1周年	来館者数 45,409人
2006年5月	来館者 10万人突破
2008年4月	来館者 20万人突破
2009年9月	来館者 30万人突破
2010年12月	来館者 40万人突破
2012年5月(2004年4月のリニューアルオープンから8年1ヶ月)	来館者 50万人突破
201X年	来館者 100万人突破？

もしかしたら、夢の100万人突破も遠い未来のことではないかもしれません。

これまでご来館いただいたすべての皆様に、心より御礼申し上げます。これからもより多くのお客様に訪れていただけるよう、スタッフ一同努めてまいります。

企画展 『冒険家・植村直己の足跡』

内藤 智子 (植村冒険館学芸員)

平成24年4月26日から大型連休を挟み5月末まで、明治大学博物館特別展示室で「冒険家・植村直己の足跡」展を開催した。ここ駿河台には山岳部の部室があり、植村直己氏もほぼ毎日通っていた場所である。大学で行う企画展ということで、光栄ながら身の引き締まる思いで準備を行った。

【植村直己】

冒険家・植村直己は昭和16年兵庫県城崎郡国府村(現・豊岡市)生まれ。農家の7人兄弟の末っ子で、高校まで地元に住み、明治大学農学部農産製造学科に入学した。入学とともに山岳部に入り学業そっちのけで部活動に没頭、年間200日以上を山登りで過ごした。外国の水河のある山々に憧れ、卒業とともに片道切符だけを手に日本を飛び出した。海外渡航が自由化された1964年のことである。ヨーロッパ、アフリカ、南米と約4年にわたり外国放浪をして帰国。1970年には世界最高峰エベレスト遠征に参加し、松浦輝夫氏とともに日本人初登頂を果たす。同年北米大陸最高峰のマッキンリー

に単独登頂して、世界初の五大大陸最高峰の登頂を達成した。

このあと冒険の舞台を北極に移し、約1年グリーンランド最北の村で暮らして犬ぞりと狩りの技術を身につけ、3000kmの単独犬ぞり冒険を成功させる。続いてグリーンランド・カナダ・アラスカの3カ国にわたる北極圏1万2000kmの冒険を達成。1978年には世界初の北極点単独到達、グリーンランド3000km縦断を成功させた。最後の目標としていた南極大陸単独横断をめざすが、フォークランド紛争のため計画を断念。志半ばのまま、1984年厳冬のマッキンリーに登頂後、帰らぬ人となった。

【大学で開催する】

植村冒険館は東京都板橋区にある。植村氏の自宅があり、マッキンリーで遭難するまで約15年暮らし、ここから冒険へと出発していたことが縁で、氏の業績を永く後世に伝えていくため平成4年に板橋区によって設置された。板橋区が出資した公益財団法人植村記念財団が運営を行っている。館内の展示室では年4回

テーマを変えて企画展を行っている。

明治大学とは都営三田線で30分足らずのところであり、同じ23区内でわざわざ企画展を行うからには、冒険館にはない特色を出さなければならない。そのため、1.学生に見てもらえる内容であること、2.植村氏にとっての明治大学(=山岳部)という点に焦点を当て、展示を構成した。

【展示の内容】

山岳部、エベレスト、北極点と大きく3つの冒険を柱に、説明パネル、資料、写真パネルで紹介した。

「山岳部」のコーナー

「山岳部」のコーナーでは、植村氏が現役時代に使っていた布製のザックを展示した(生まれ故郷である豊岡市の植村直己冒険館から借用)。植村氏にとって大学で山岳部に入ったことが「冒険の原点」である。その山岳部時代に実際に使っていたザックであり、山岳部の仲間からも「よく捨てずに取っておいた」と感心されるほどで、「明大」と名入れがある。

実は、明治大学の山岳部では伝統的に



会場風景



山岳部 ザック

このザック（キスリングと呼ばれる）を使うことになっており、10年ほど前まで現役の学生もこれを使っていた。布製でキスリング自体が重く、肩ひもがあるだけ。合宿では個人装備、共同装備（テントや鍋など）、食料を入れると、多いときには60kgにも達するという。しかし、ついに製造中止になってしまい、キスリングの伝統も途絶えてしまった。

ここでは当時の山岳部の活動歴を紹介したが、現役の学生はほぼ当時と変わらない日程で部活動をこなしている。現在の山岳部は人数こそ減ってしまったが、世界に一流のクライマーを輩出している「名門」なのである。

「エベレスト」のコーナー

1970年のエベレスト登頂時の装備を展示。39人の隊員中たった3人とシェルパだけが世界最高峰の山頂に立つことができた。アイスフォールや垂直の岩壁など、写真パネルでその厳しい行程を紹介したほか、1970年当時、日本初の世界最高峰への挑戦ということで、当時の技術の粋を集めて作られた最高級の装備品が隊員全員に支給された。現在では考えられない手厚い遠征隊で、それくらい、国を挙げての、失敗が許されない大遠征だったのである。展示品は植村氏が山頂に立った時の装備であるが、40年前はこういった装備で世界最高峰に挑んだのである。

「北極点」のコーナー

1978年の北極点単独到達で使用した装備を展示した。毛皮のブーツや敷物（テントの中で使用）、無線機などを紹介。植村氏はこの北極の冒険の前に約1年間グリーンランド最北の村に居候して犬ぞり修行をしており、その経験から、「そ

の土地に住む人々のやり方を真似することが冒険を成功させる秘訣」という植村流の冒険哲学に徹していた。そのため、アザラシやホッキョクグマなどの毛皮で作った衣服を積極的に取り入れていた。

さらに、北極点までの道のりは、凍った北極海を進んでいく。氷はつねに動いており地図などない。そのため現在位置を知る必要があるのだが、GPSなどない当時は「六分儀」と呼ばれる道具を使って太陽の高さを測り、現在位置を計算で求めていた。

いずれも、装備から各冒険ならではの長を伝えることができるものを選んで構成した。

【学生に伝えたいこと】

植村氏が遭難して今年で28年になる。存命なら71歳、学生にとっては「おじいちゃん」の世代に当たるだろう。実体験として植村氏の行動を見ていないわけだから、興味を持ってといってもなかなか難しい。そこで人柄の一端を紹介しようという意図で「はがき」を展示した。

これは外国から友人や先輩に宛てたはがきで、米粒のようにびっしり文章が書かれている。ケース越しだと読めないくらい細かい。文字起こしをしたキャプションのほうスペースを取ってしまうくらいのけっこうな分量の文字が書かれている。内容は近況報告なのだが、極寒の地で世界初の大胆な冒険をする冒険家がこれほど細かい字で書き記しているのである。

このはがきだけでなくほかの資料もそうだが、展示資料にはそれぞれにエピソードや伝えたいことがある。来館者が見た資料のなかに、ほんの一つ記憶して

もらえればそれはいつかある日、何かの出会いで植村氏にたどり着くに違いないと強く念じているのである。

【最後に】

大型連休を挟んだこともあって期間中の来館者数は約4500人を超えた。予想以上の入館者数に驚きとともにほっとしている。それ以上に、通りがかりの人や学生、若い人たちが見学してくれたことは主催者として一番希望していたものだったので、目的の一つを達成できたと感じている。

1995年に明治大学記念館が取り壊されるまで山岳部の部室は記念館の奥にあった。現在、植村氏が通っていたころの校舎の面影は残っていないが、お茶の水の駅を出て大学に向かい始めると前が開け、緩やかな坂道になる景色は変わらぬ「駿河台」である。そういった意味で「明治大学を会場にした植村直己展」というイメージが多く集客につながったようにも感じている。またこれは余談だが、一般人（年配の人）は学生でなければ大学に入れないと思っているようで、当館への問い合わせに「学生でないが見られるのか」というものもあった。

冒険館とは違う来館者層に潜在的な需要と若い世代への可能性を見いだすことができたようにも感じている。

最後に、今回の企画展開催に当たり、明治大学文学部教授（学芸員養成課程）矢島國雄氏をはじめ、明治大学博物館学芸員忽那敬三氏、大学各部署のみなさまに大変お世話になりました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。



エベレストのコーナー

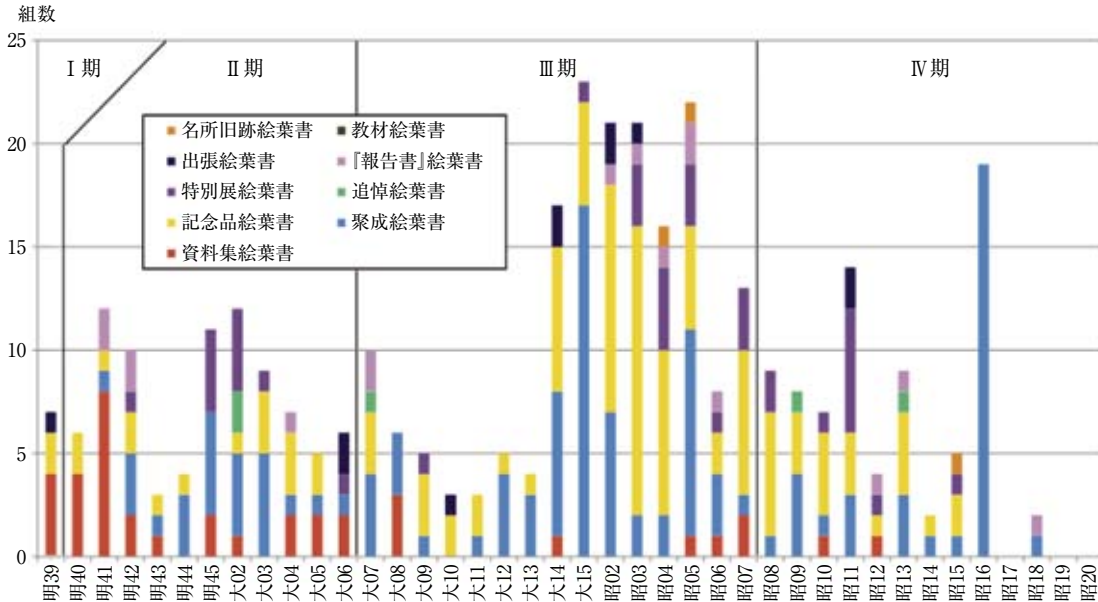


北極点のコーナー



友人へのはがき

表 考古学絵葉書の時代的傾向



追記 資料1～4は筆者所蔵絵葉書である。また資料1～3については、旧著作権者である京都大学大学院文学研究科考古学研究室、東京国立博物館、日本考古学会に照会し、掲載許可を受けた。

る文字情報には、編集に携わった研究者の意向が強く反映されている。

記念品絵葉書 学会の総会、博物館開館などの慶事に作成されるもので、行事の当日 (= 発行年) に配布、原則は非売品。考古学会の総会記念絵葉書がその中核をなす。資料3の「武蔵國南多摩郡川口村檜原石器時代住居跡」は、後藤守一が昭和7年の総会で寄贈した絵葉書のうちの一葉。本遺跡は後藤守一が昭和6年に東京府史蹟調査の一環で発掘したもので、調査直後、且つ報告書刊行以前に絵葉書が出版されている。考古学会総会記念絵葉書は遺跡調査概報のほか、個人コレクションや総会記念特別展資料などで構成。

追悼絵葉書 研究者の歿後に発行、遺影や遺墨による顕彰が目的。故人の旧所属機関や顕彰会が編集、追悼行事で配布されるもので非売品。坪井正五郎、三宅米吉、濱田耕作の追悼絵葉書を確認。

特別展絵葉書 特別展に併せて発行、展示遺物や関係資料を被写体とする。主催者が編集、原則は特別展期間内に販売。

『報告書』絵葉書 発掘調査報告に類する内容で、調査風景や遺構、出土品で構成。報告書刊行前に発行されるのが一般的。坪井正五郎の発案と考えられる。また喜田貞吉『遺物遺蹟繪葉書』(大正6年頃)など、考古学者が自身の研究(調査)成果を絵葉書にしたものもある。

出張絵葉書 在外研究などで渡航した研究者が、滞在先で撮影した写真を絵葉書に仕立てたもの。関係者への出張報告、御

土産として配付したもので非売品。梅原末治など主に京都帝國大學関係者が作成。

教材絵葉書 講義や授業の参考写真に絵葉書を用いたもので、高橋健自と関野貞が東京美術学校の特殊講義用に作成したものを確認(III期)。一組100葉程度、恐らく非売品。高橋健自史料は遺物写真のみであるが、関野貞史料には出土地や銘文などの文字情報が加えられる。

名所旧跡絵葉書 各地の名所旧跡を扱った絵葉書の中に遺跡や考古遺物が組み込まれたもので、観光地の御土産物。絵葉書店や書店などが製作・販売し、研究者の関与は殆ど認められない。代表例は埼玉県吉見百穴絵葉書。東京都では、溶岩流下の縄文時代遺跡として注目された「大島野増村龍の口石器時代ノ遺物」(資料4、II期)が初出と思われる。

Ⅲ 考古学絵葉書の時代的傾向

以上の分類に基き、発行年が判明した絵葉書を年代順に配列したのが表である。全体的に見ると各種絵葉書は概ねII期までに出揃っており、内容及び量においてその盛行はIII期後半であることがわかる。次に考古学絵葉書の時代的傾向とその誘因を探っていきたい。

資料集絵葉書は明治39年～大正8年、昭和5年～昭和8年に比較的多く発行されている。前者は明治末から大正期にかけて新渡戸稲造や柳田國男らが提唱した郷土学の影響であり、後者は昭和初期の地理教育界において郷土研究が志向され

たことと連関していると考えられる。

考古学絵葉書の中核をなす聚成絵葉書は、III期後半に増加傾向が見られる。大正時代後半には図集(コロタイプ図版数葉と解説文を帙などに入れたもの)が多種出版されている。これは、明治時代以来発掘された考古遺物に関する情報を、学界全体で共有する意図があった。聚成絵葉書には出土地や所蔵機関、法量が明記され、また解説文が付されるなど図集に準じた体裁であることから、図集刊行と連動した動きとして捕らえられる。併せて、新たな出土資料や個人収蔵品を主題とした記念品絵葉書(特に考古学会総会記念絵葉書)の増加も、同様の理由で説明できる。そこには、絵葉書が書籍に比べ安価で多量に印刷できるという経済的要因も考慮すべきであろう。

結語

資料1は、濱田耕作が長谷部言人に宛てた著書寄贈の御礼状である。しかしながら、このように考古学絵葉書を通信手段として用いた例は管見の限りわずかである。これまで述べてきたように、絵葉書は考古資料の画像情報を公開・共有する媒体であり、調査成果を速報的に伝える手段として製作されていた。そして、規格性とコロタイプ印刷という絵葉書自身の特性も相俟って、その多くは『送られない絵葉書』として考古学者の手許に置かれ、研究資料や論文図版の素材に利用されていたのである。

現代を映す鏡としての 伝統工芸

外山 徹

(商品部門担当学芸員)

イメージのギャップ

佐賀県立九州陶磁文化館は、美術作品の鑑賞から製造技法の理解に至るまで、陶磁器の専門館として我が国を代表するにふさわしい博物館である。中でも有田焼の伝世品を集めた膨大な数の柴田コレクションは出色の存在である。初期伊万里に始まり、ヨーロッパ社会を魅了した柿右衛門手、元禄の頃には染錦の華やかさと、まさに近世有田の陶磁史を辿るに格好の教科書である。ところが、そこから車で10分足らずの有田焼卸団地に行くと、ショーウィンドウの中には古伊万里の面影もない商品群が溢れている。

初期伊万里の抽象化された草花文や、古伊万里の中国写しの芙蓉手や祥瑞手など、古典柄は数多ある商品群の中の1ジャンルとなっているのが現実である。

そこでは、ある時期、陶磁器のデザイ

ンへの考え方が変わり、新たな伝統が築き上げられつつあることを実感するとともに、オールド・ファンにしてみれば「こんなのは伝統じゃない」という感想が洩れるかもしれない。美濃焼（岐阜県）の桃山写しが、桃山のテイストほぼそのままであることに比べるとこれは全く別次元の展開である。磁器の絵柄が変わらざるを得ない事情として、手描きで手ごろな商品を開発しようとすると、どうしてもシンプルな絵付けとならざるを得ない点がある。一方、祥瑞柄など手数をかけて忠実に再現しようとしたらものすごい価格になってしまう。したがって、レトロな雰囲気や醸す中国写しの染付を求める消費者は、転写紙による絵付けの製品に目を向けざるを得ないわけである。そして、そもそも、伝統柄ばかりが消費者から求められているわけではないのである。

磁器への絵付け

一デザイン革新

陶磁器に絵柄を付けるという考え方は古くからあり、鎌倉時代の灰釉陶器には線刻で魚の絵を描いたものがある。その後、16世紀末、桃山の志野焼の時代には鉄絵具で抽象化された植物文を描くようになった。ここから絵付けの進歩は急である。17世紀初頭の初期伊万里の文様は志野焼に通ずるものもあるが、しばらく後、障壁画の写しや中国柄のコピーが意識されるようになると瞬く間に技術水準は向上し、紙や布地に描かれるのと遜色のない絵柄が登場する。

白い磁胎は格好のキャンバスであり、上絵付けの発展はそれまでにないカラフルなデザインを実現した。カラー・バリエーションの限られる釉薬の発色によってデザインがなされる陶器の産地とは全く異なる位相がある。そして、絵画一般のあり方が時代とともに変化したように、磁器の絵柄もまたその時代その時代の空気や価値観を反映しつつ移り変わるのであった。

この、絵を付ける方法として、手描きの技法は伝統的な有田焼を定義するのに最も分かりやすい指標であると言える。厳密には磁胎の成形方法や原料の組成、施釉方法、絵具の調合にも伝統であるか否かを問う要件は存在するが、ここでは器の形を含むデザインという観点から話を続けたい。



手描きによる絵付けの工程見本
(常設展示室に展示中)



多彩な絵柄表現の展開を見せる有田焼の企画商品（新収蔵品展 2010 の展示から）

移り変わるデザイン

伝統工芸の器と言うとどのようなものか思い浮かぶだろうか？とりあえず、食器というジャンルについて言えば、絵柄の揃った碗、皿、小鉢といったところだろうか。ところが、現在、伝統的な手作り・手描きの技法で作られる食器の中で一番ポピュラーな器種と言うと、およそ伝統というイメージではないマグカップやフリーカップなのである。器の形の変化として象徴的なのは酒器である。かつて酒器と言えばお銚子2・お猪口5という“揃いもの”が定番であったが、現在の酒器はと言うと焼酎カップとビールカップであり（見た目はフリーカップそのものだが）、単品ないしペアの販売がほとんどである。

この変化をどう読むかと言うと、われわれ日本人の生活習慣の変化を見事に反映していると言うよりない。家族が揃って食卓を囲むのは週末に実現すればまだまだよい方かも知れない。5ないしそれ以上の形の揃った食器はあまり必要とされなくなったのである。また、家庭における来客の接遇機会の減少は、揃いの茶器や酒器の需要を圧倒的に衰退させ、

人々は器に“見栄え”を気にする必要がなくなったのである。

一方で器の色形に対する個人の意向の反映は顕著である。以前であれば青白の祥瑞柄が当然のごとく受け入れられてきたのだが、現在、人々は数ある選択肢の中から自分の好みの絵柄を選んで使用するようになった。転写紙やパッド印刷による多様な絵柄の導入により、職人が固守してきた定番柄に我慢する必要はなくなった。例えば、食品全般を見てもナショナルブランドによる寡占状態の時代は過ぎ、輸入品も加わったバリエーション増により、消費者は「選べる」環境を手に入れている。既存のものを何不思議なく受け入れることによって保たれてきた「伝統」は、多様化とその要因の一つである情報化の時代において大きな曲がり角にさしかかった。デザインに制約の少ない色絵磁器の世界においては、すでに過去がそのまま明日のものとして受け入れられる時代ではなくなったのである。

伝統工法の復権

変化の兆しは伝統の維持にとっては不吉なもののように感じるが、一方、悲

観的な状況ばかりではない。伝統というものが、実際には、時代への適応力で生き残ってきたのと同様、有田においても伝統工法が存続する新たな兆候が出てきている。機械化による効率化の前に滅亡に瀕するかと思われた手描きの絵付だが、デザインの多様性が進むにつれ少量生産で多くのバリエーションを生み出すにはむしろ効率のよい方法であることが理解されつつある。確かに見た目のイメージは変わったが伝統工法は生き続けている。

デザインの多様性—それは配給食や国民服に象徴される時代とは正反対の世の中、すなわち、多様な価値観が受容されるべき時代を象徴しているのかも知れない。一方、マグカップという万能食器の台頭は、人間関係の希薄化、内向化、習慣を無視したエゴイズムなどの兆候をはらむものかもしれない。伝統的工芸品としての陶磁器は現代社会のあり様を映す鏡である。これからの伝統工芸を考えると、むしろこれからの社会をどのようにするかという問題につながってゆくのである。

人々の思いや交流など、日常にある当たり前のことは記録には残りにくい。史料の隙間に隠された人々の姿が垣間見えるところに、「雑」の可能性を感じる。雑とは「一定の基準で分類した時、どの項目にも入らないこと」(『新明解国語辞典』)である。古文書の目録では、年貢・土地・家などといった特定の項目に該当しない文書が、雑として巻末にまとめられている。雑に分類された文書は作成者や年代が不明で、分析対象とするには困難なものが多い。

当館収蔵の古文書のうち、閲覧要請が多い文書群の一つに出羽国村山郡関係文書がある。中でも山口村(現山形県天童市)中組名主伊藤家旧蔵の山口村文書は、質量ともに優れた文書の一つで、江戸～明治時代の地主家の経営や村政、山論関係の史料が充実しており9378件を数える(註1)。今回はそのうち1パーセントにも満たない雑に収められた一文書を取り上げる(写真1)。

「浮世のさまの三幅対」との書名で目録に収録された一通の文書は、「世の中の変化色々の中に十より一を撰出し其内を三ツ揃て浮世のさまを三幅対(註2)となすのミ」という文言で始まる。10の論評を立てそれぞれに3つの具体例が示されている(表1)。

この文書はいつ作成されたものなのだろうか。「アメリカ登城」とあるのは、米国総領事ハリスの江戸城登城のことであろう。安政3年(1856)8月下田に到着したハリスは江戸への出府を再三せまるが、幕府はその要請に容易に応じようとせず、ようやく同4年10月に江戸城で將軍徳川家定に謁見して大統領の親書を上呈した。それとともに条約締結のための交渉が始まり、安政5年6月に日米修好通商条約の調印がなされた。確かに「六ヶ敷そうて直二極た」(難しそうですすぐに決まった)出来事である。

「品川台場」は嘉永6年(1853)8月から翌年5月までに、品川浦沖に建設された6基の砲台である。ペリー来航後、幕府が海防策の一環として11基の台場を構築する計画を立てたが、構築半ばにして資金難により中止された。実戦に使われることはなく、西欧諸国の脅威が退いたのちは「とふし捨り物に成た」(当時廃り物になった)にちがいない。

幕末の世と、「下総関宿」「奥州白川」(白河)、「福山の遠行」「長岡之村替」、「下総佐倉」「上田の再勤」に共通するのは戊辰戦争である。戊辰戦争とは、慶應4年(1868)正月に始まる鳥羽・伏見戦争から上野戦争、そして北越戦争・東北戦争、さらに翌明治2年5月に終わる箱館戦争までの戦争の総称で、東日本一帯を中心に、新政府軍と旧徳川幕府・佐幕派諸勢力との間で戦われた。関宿と白河はともに古くから関所としての役割を担っていた土地である。関宿は利根川と江戸川に挟まれた交通の要衝で、近世には河岸場や川関所が設けられ、江戸川舟運の一大基地として繁栄した。関宿藩内は勤皇派と佐幕派に分裂し、藩主以下60名が上野彰義隊として戦った。白河は白河の関で知られるみちのくの玄関であり、奥州道中の重要地点として発展した。東北戦争では激戦地となり城は焼失、城

下も大きな被害を受けている。

長岡は北越戦争の中心となった地である。新政府軍の北陸道進軍に際し、長岡藩の家老河井継之助は政府軍の軍監岩村精一郎と面談し、進軍の猶予を嘆願するが決裂し、城下は焼野原となった。藩領は一時政府軍に没収されたが、明治元年(1868)12月に古志・三島両郡の2万4千石が与えられて藩の再興が許されており、「村替」とはこのことを示していると思われる。

福山は松前藩の別名である。榎本武揚が率いる旧幕府海軍は、箱館に「遠行」(遠征)し五稜郭に政権を樹立した。佐倉藩は、慶喜助命嘆願による出兵で謹慎処分となったのち、新政府に加担し戊辰戦争で各地に出兵しており、その立場は「覚束ない」。上田藩は新政府側に与して北越戦争に出兵し、会津戦争に「再勤」している。以上のような内容から、日米修好通商条約から戊辰戦争の頃までの世相が反映されていることが分かる。また「当年(今年)大当り」のこととして「長岡之村替」が挙げられていることから、明治元年の成立であると考えられる。

その他、「市川市蔵」「市川小團二」「片岡仁左衛門」は歌舞伎役者、「久喜万字屋」「角玉」は吉原の妓楼の名である。政治だけでなく、芸能や風俗の話題も取り入れられている。

この文書を面白おかしく読むためには、相応の教養と見聞が必要であったことだろう。高い関心と世相を冷静に見つめる目を持ち、かつ現代のように情報網の発達していない時代に、各地の様子を知ることのできる情報収集力が求められる。山麓の村にこのような文書が所蔵されていたことは興味深い。名主家の知の水準の高さがうかがわれる。

(増田 由貴)

(註1) 日比佳代子「刑事部門所蔵の古文書について―出羽国村山郡関係文書―」[MUSEUM EYES] 51 2008

(註2) 三幅対は、もとは三幅で一對となっている掛け物のことを指すが、ここでは三つそろって一組をなすものの意味である。

論評	具体例	論評	具体例
未だ頼しき荒手の三幅対	下総関宿	頻りに張り付ける	川路の扉
	市川市蔵		迷子のしるべ
	奥州白川		山形の見習
欲ばってしそこなった	奥御右筆組頭	難しそうですすぐに決まった	土手の取払
	市川小團二		アメリカ登城
	請負ノ地ノ元メ		上田の再勤
当年大当り	福山の遠行	当時廃り物になった	小石川隠居
	沢庵大根		品川台場
	長岡之村替		河内奴
始終覚束ない	下総佐倉	まんざら根のない事でも無いという	留山の改事
	久喜万字屋		小川へ駕籠訴
	西洋鉄砲		国替の評判
思いの外寐入った	鈴木藤吉	難しき身の上をよく取り直した	大川奉行
	片岡仁左衛門		角玉
	夏目左近		雉子橋奉行

【表1】(写真1)の内容を分かりやすいように、現代の表記に改めた



【写真1】

明治大学博物館・南山大学人類学博物館・名古屋市博物館共同主催特別展

「驚きの博物館コレクションー時を超え世界を駆ける好奇心ー」 が開催されます

2010年から始まった明治大学博物館と南山大学人類学博物館の協定事業も今年で3年目を迎えます。昨年度は南山大学人類学博物館の考古・民族コレクションを明治大学博物館で展示しましたが、2012年度は明治大学博物館の貴重なコレクションの数々を、名古屋の地で初めて公開します。当初は南山大学での展示を予定していましたが、人類学博物館が建て替え工事に入ることから、南山大学および名古屋市博物館のコレクションとあわせて、名古屋市の中心部に位置する名古屋市博物館の特別展示室で公開することとなりました。



ニュルンベルクの鉄の処女（中世ドイツ）

展示の約半数を占める明治大学博物館のコレクションは、商品・刑事・考古の三部門を軸に、ことわざカルタ資料、徳川幕府

刑事図譜、鉄の処女とギロチン、国指定重要文化財である岩宿遺跡・砂川遺跡・夏島貝塚・出流原遺跡出土資料などのほか、明治大学の東海地方における発掘調査の代表例である西志賀貝塚出土遺物なども里帰り資料として出品されます。さらに、南山大学と名古屋市博物館が所蔵する資料をあわせ、旧石器時代から現代まで、また考古資料から民族資料、文献資料など、まさに時空を超え世界を駆けめぐる博物館コレクションの奥深さを知ることができる展覧会です。

名古屋で明治大学博物館を広くアピールするため、当館を代表する資料の数々が、準備期間も含めて約2か月弱の間留守をすることになりますが、この機会に収蔵庫内で保管している資料を常設展で公開します。また、展示資料の搬出入のための臨時閉館が1月下旬と3月下旬に予定されていますので、日程が決まり次第、明治大学博物館ホームページ等でお知らせします。



壺（西志賀貝塚、弥生時代）

驚きの博物館コレクションー時を超え世界を駆ける好奇心ー

主 催：明治大学博物館・南山大学人類学博物館・名古屋市博物館

協 力：名古屋市立大学

会 期：2013年2月2日（土）～3月17日（日）（37日間）

休 館 日：月曜日

開館時間：午前9時30分～午後5時（入場は午後4時30分まで）

観 覧 料：一般600円 高・大生400円（明大生は無料） 小・中学生無料

※団体（20名以上）割引あり

会 場：名古屋市博物館（〒467-0806 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1）

アクセス：名古屋駅から名古屋市営地下鉄桜通線「桜山」下車、4番出口から徒歩5分

金山総合駅から名古屋市営バス金山14系統「博物館」下車

栄駅から名古屋市営バス栄26系統「博物館」下車

「博物館アーカイブ」web 公開しました

博物館では、特別展など展覧会を映像記録として残し、会期終了後にも多くの方々に展示の内容や学術的背景を紹介することができる映像コンテンツを制作・公開しています。この「博物館アーカイブ」には、博物館ホームページからアクセスできます。コンテンツの第1弾は、今年の1月から3月にかけて開催した明治大学博物館と愛知県南山大学人類学博物館との合同特別展「人類史への挑戦－南山大学考古・民族コレクション－」です。南山大学人類学博物館のコレクションの由来や研究上の位置づけなどについて、南山大学教授の黒沢浩氏が解説しています。第2弾は、2012年10月から開催される博物館特別展「氷河時代のヒト・環境・文化－THE ICE AGE WORLD－」を映像コンテンツ化する予定です。映像コンテンツは、博物館ホームページ <http://www.meiji.ac.jp/museum/mmarchive.html> からいつでもストリーミングで閲覧できます。ぜひ一度ご覧ください。



南山大学人類学博物館のコレクションの由来や研究上の位置づけなどについて、南山大学教授の黒沢浩氏が解説しています。第2弾は、2012年10月から開催される博物館特別展「氷河時代のヒト・環境・文化－THE ICE AGE WORLD－」を映像コンテンツ化する予定です。映像コンテンツは、博物館ホームページ <http://www.meiji.ac.jp/museum/mmarchive.html> からいつでもストリーミングで閲覧できます。ぜひ一度ご覧ください。

図書室からでは、博物館併設の図書室に関することをご紹介します。今回は、特別展に関連した図書を紹介します。



いよいよ10月12日から、特別展「氷河時代のヒト・環境・文化」が開催されます。今回は展示に関連する図書として、『列島の考古学 旧石器時代』をご紹介します。

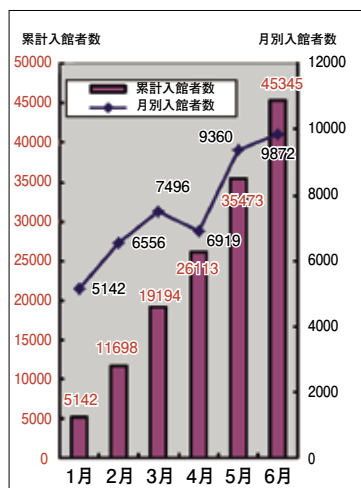
この本には、現在より何度くらい低い気候だったか知る方法や（発掘された樹木の根からわかります！）、動物がなぜ絶滅したのかという様々な仮説、過酷な氷河期に適応する為に生まれた技術や、狩猟の方法と食材の調理法、石器の作り方や使用痕についての研究、さらに、旧石器時代の住宅事情と生活スタイルなどがわかりやすく書かれています。写真も豊富なため、目で見てもわかりやすく、特別展を見る前に読むのもよし、見た後に読むのもよきな1冊となっています。

秋のひとつき、博物館と博物館図書室で氷河時代に思いを馳せた後は、先人の知恵を生かしつつ、来る冬への準備を始めましょう！！

書名：『列島の考古学 旧石器時代』
著者：堤隆 著
出版社：河出書房新社
出版年：2011年5月

配置場所：博物館一般
請求記号：210/662//M
資料ID：12011109159

博物館入館者数の動き (2012年1月～6月: 延べ人数)



2004年4月以降の総入館者数累計 517,773人

特別展来場者内訳		開催日数	来場者数
1/12～1/15	漆サミット 2012 展示会	4日間	692
1/20～3/10	人類史への挑戦 —考古・民族コレクションの系譜—	51日間	4214
3/17～4/16	URUSHI! —漆 Part1 多彩な漆利用 栽培から漆芸まで	31日間	2668
4/26～5/27	冒険家・植村直己の足跡	32日間	4549
6/9～7/9	URUSHI! —漆 Part2 並木恒延漆絵の世界	31日間	5132

1月～6月	延べ人数
図書室利用者数	2456
教室等利用者数	917

● 団体見学の記録 2012年1月～6月

【一般】

千葉県立博物館友の会歴史サークル (8名)・福井県鯖江市議会
議会運営委員会 (9名)・みなの会 (14名)・戸山平成会 (40名)・
NHK 学園市川オープンスクール (22名)・北足立郡市町同和对
策推進協議会 (30名)・社団法人 日本セカンドライフ協会 (12
名)・駒門消防団 (12名)・NHK 学園市川オープンスクール (13
名)・町田市成瀬台ラジオ体操会 (29名)・寺子屋品川宿 (20名)・
ぶらっと東京街歩き (45名)・君津市上総公民館 (23名)・水子
貝塚市民学芸員 (10名)・高萩市関係者 (40名)・障害者の働く
場もえぎ (26名)・館山市九重地区公民館 (40名)・朝日カルチャー
センター (9名)・ペトロナス工科大学学長一行 (4名)・大磯歩
こう会 (42名)・いわき南地区保護司会女性部会 (24名)・神社
へいってみよう (13名)・野方ことぶき会 (20名)・シニアライ
フを生き生きと歩む会 (15名)・多摩歴鑽会 (25名)・あじさい
歴史サークル (13名)・江戸歩き食べ歩きの会 (20名)・NPO
法人東京シティガイドクラブ (25名)・小金井史談会 (62名)・
八代高等学校関東地区同窓会 (19名)・六ヶ村生き生き交流会 (110
名)・杉並モクモク会 (20名)・茨城県退職高等学校長会クラブ「旅

の会・ゆう」(31名)・読売日本テレビ文化センター (7名)・図
書館ボランティア草加 広報部 (6名)

【小・中学校】

千代田区立麹町中学校 (50名)・東村山第五中学校 (36名)・雫
石町立雫石中学校 (6名)・盛岡市立城西中学校 (32名)・岩見
沢市立光陵中学校 (6名)・あま市立七宝北中学校 (6名)・豊川
市立西部中学校 (5名)・豊川市立南部中学校 (3名)・敦賀市立
松陵中学校 (91名)・多治見市立南姫中学校 (5名)・紀美野町
立野上中学校3年生 (9名)・御嵩町立向陽中学校3年生 (5名)・
大府市立大府西中学校 (4名)

【高等学校】

麹町学園女子高等学校 (12名)・成城学園高等学校 (20名)・小
松原女子高等学校3年8組 (41名)・日本学園高等学校 (5名)・
山梨英和中学校・高等学校 歴史研究同好会 (10名)・幕張総合
高等学校3年生 (75名)・岩倉高等学校2年生 (37名)・雲雀丘
学園高等学校 (23名)・一橋高等学校定時制 (10名)・武相高等
学校 (100名)・大宮開成高等学校2年生 (146名)

【大学・大学院・専門学校】

帝京大学法学部法律学科1年13・14組 (25名)

新グッズ
登場!!

M2 カタログ 団扇 (神田昌平橋 300円) 始めました!

今夏、ミュージアムショップ「M2 (エムツー)」のグッズに新
たに団扇が仲間入りしました!

表は、御茶ノ水界隈を描いた錦絵「神田昌平橋模様換掛目鏡
橋要路光景之真圖」をあしらいました。神田川の下流側から橋を
見ており、湯島聖堂や現在のニコライ堂の前身である東京十字架
聖堂が描かれています。裏には、多彩な当館3部門の資料をプリ
ント。上から、宮城県玉里舟塚古墳の「挂甲を着た武人埴
輪 (模作)」、茨城県玉里舟塚古墳の「挂甲を着た武人埴
輪 (レプリカ)」です。当館の団扇を扇ぎながら御茶ノ水界隈を
散策してみたいはいかがでしょうか。

また、考古ボールペンをリニューアルしました!青森県亀ヶ岡遺跡の遮光器土偶と重要文化財に指定されている栃木県出流原遺跡の
顔面付土器をデザイン。来館記念やお土産にいかがでしょうか。



